



文 ニック・フォークス
翻訳 小金井良夫
写真 ジョエル・スタンス

1970年代は巨大な変化の時代であった。オイルショック、パンク・ロック、狂乱物価、そしてベトナムにおけるアメリカの屈辱的な敗北の10年であった。それは混乱の時代だったが、同時にいくつかの優れた壮挙により記憶に残る10年でもあった。例えば1976年は超音速旅客機コンコルドが通常運航を開始した年であり、当時世界一の高さを誇ったトロントのCNタワーが完成した年であり、パテック フィリップが120メートル防水のスチール・スポーツウォッチ、ノーチラスを発表した年であった。人類はより速く移動し、より高い建物を建造し、パテック フィリップは、1839年の創業以来初めて、ダイビングに使用できるタイムピースを創作した。しかしコンコルドは2003年で運航を終了し、以後大西洋横断路線は亜音速時代に逆戻りした。またCNタワーは、世界で最も高い建造物としてのタイトルを2010年を限りに返上した。一方パテック フィリップのノーチラスは、本誌の読者ならよくご存じの通り、今日もオーナーの手首に着用されて活躍を続けている。

ノーチラスは今日、多数のメンバーからなるファミリーであり、1997年に発表されたアクアノートは、その近親ということができる。1970年代には「ジャンボ」の愛称で呼ばれた3700/1Aモデルのみであったが、それで十分であった。このモデルは、ほとんどすべてにおいてそれまでのパテックフィリップと異なっていた。ゴールド・ウォッチよりも高価なスチール・ウォッチであり、水中で着用できる防水性能を備えたノーチラスは、混然一体となったケースとブレスレットの卓越したデザイン、特異な舷窓型ケース、きわめて大きなケース径、さらに洒落たレトロなコルク張りの化粧箱など、すべてが

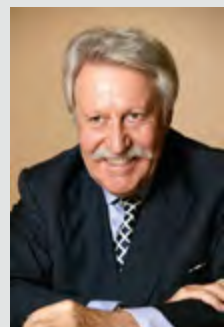
パテックフィリップの従来の常識とかけ離れていた。ジェラルド・ジェンタによってデザインされたこの腕時計は、20世紀後半の最も卓越した伝統的なデザインの一つとして、時計史に残るものである。それゆえ、「初め私はあまり確信がなかったのです」という、このタイムピースに関するフィリップ・スターンの述懐は興味深い。フィリップ・スターンは当時、より多くの経営責任を父から委譲されつつあったから、この慎重さはよく理解できる。彼は回想する。「ジェラルド・ジェンタがパテックフィリップのためにこのようなものを創作することを提案したのは、かなり前のことでした。私たちはプロトタイプ

を作ることを決め、プロトタイプができた後、ノーチラスを発売させることにしたのです」。彼の躊躇は、この時計が「直観的でない」、という点に根ざしていた。「当時は困難な時期でした。私たちは、きわめて薄くファッショナブルなクォーツ・ウォッチと競合するという、苦戦を強いられていたのです」。機械式で大型サイズのノーチラスは、あえて異なる方向を打ち出した。「高級時計は小さく、薄いのが通例でした。その反対に行くことは、新たな思想とはいえずとも、パテックフィリップにとっては新しい戦略でした。ノーチラスは、若年層の新規顧客、旅行やスポーツを楽しむ人々のためのまったく新しいラインだったのです」。すな

わちフィリップ・スターン自身のような顧客ということである。当時30代後半のスターンは、強烈なパーソナリティであった。百戦錬磨のスキーヤーであり、時計業界に入っていなかったらチャンピオンとなっていた可能性があった。また熱心なヨットマンでもあり、レマン湖上のヨットレースで頻繁に優勝を勝ち取っていた。ジェラルド・ジェンタはそれをよく知っていた。未亡人エブリン・ジェンタは回想する。「スターン家の人々は大のセーリング好きでした。だから、ジェラルドは船のことを考え、船の舷窓の形からインスピレーションを得たのです」。

初期の広告は、頑丈さと防水性能同様、多様性に溢れたエレガンスを特に強調している。

ADDITIONAL PHOTOGRAPHY: JEAN-PAUL CATTIN, CATHERINE HYLAND
ARTWORK: © GERALD GENTA



[当見開きページ] スイス生まれの著名なデザイナー、ジェラルド・ジェンタ(上)は、新しいスポーツウォッチのインスピレーションを求めて、スターン家の好むセーリングに目を向けた。ケースの舷窓を模した形状と、レマン湖の水面を思わせる精緻にポリッシングされた表面は、真に象徴的な時計にふさわしい。初期の広告(左)は、仕事にもレジャーにも適する多様性と、

ステンレススチール仕様の高級タイムピースとしてのステータスを強調している。今日多数のバージョンが存在するが、古典的なノーチラスは、例えば1976年発表の3700オリジナル・モデル(左上)と、ジェンタの初期のスケッチ(右上)に見ることができる。[21ページ] 2006年、誕生30周年を記念し、巧みなりニューアルが加えられたノーチラス5711モデル。

その数年前、ジェラルド・ジェンタは、オーデマピゲのためにロイヤルオークをデザインしていた。この2つのモデルには共通点が見られる。しかし後発のノーチラスは、ジェンタのスタイルの発展を示している。予備的なスケッチや紙の模型を見ると、生涯を通じて作品が進化し続けていく偉大な芸術家のように、エレガントな機能美溢れる時計の創作を目指すデザイナーの思考の進化をたどることができる。

ノーチラスにはロイヤルオーク以来の進歩が見られる、というのがエブリンの意見である。「ジェラルドは、ノーチラスをロイヤルオークより生活に密着したものにしました。ロイヤルオークは、今日ではデイナージュ

ケットと共に着用されていますが、元来純粋なスポーツウォッチでした。これと対照的に、ノーチラスはスポーツですが、一日中着用することができます」。頑丈さと防水性能同様、多様性に溢れたエレガンスを謳ったノーチラスの初期の広告(「ウエットスーツにもデイナージュ用のスーツにもよく似合う」)は、この点を特に強調している。しかしこのパテックフィリップの新しいタイムピースにも欠点があった。製作がきわめて困難だったのである。当時、時計メーカーは競って製造工程を内製化しつつあり、それはケースとブレスレットの製造も含むものであった。3年ほど前、私はパテックフィリップのポリッシング工房を見学し、サティナージュ、ポリサージュ、シユター

ジュ、アングラージュ、アヴィヴァージュ、サブラーージュ、フートラージュ、エムリサーージュ、ラヴァージュ、ラビダージュなど、ノーチラスの多数の面に施される、丸みを帯びた滑らかな縁、鋭い角をなす縁、光沢あるポリッシュ仕上げ、艶を消したサテン仕上げなどの様々なポリッシング工程を目の当たりにして驚嘆した。発表から40年を経た今日も、ノーチラスのケースとブレスレットの製作は難しい、高度な作業である。ケースの設計・製作のエキスパート、ジャン・ピエール・フラティエニ氏は1970年代初め、ジェラルド・ジェンタと共にノーチラス・ケースの設計に当たっていたが、作業は困難をきわめたという。「防水時計が登場し、新たな問題が生まれました。それ



ステンレススチール仕様のオリジナル・モデル「ジャンボ」(25ページ左上、1976年発表、1990年まで現行コレクション)の成功に続き、様々な素材、サイズ、文字盤デザインのモデルが発表された。1980年、最初の婦人用モデルを発表。1981年、ミディアムサイズ・モデルを発表。1996年、ローマ数字を備えた最初の革バンド付モデル(翌年発表のアクアノートを告げるモデル)を発表。2009年、オリジナル・モデルを創作したジェラルド・ジェンタが新しい婦人用モデルのデザインに協力。2013年、女性的な文字盤の婦人用ニューモデル(革バンド、プレスレット付モデル)を発表。2015年、初めて自動巻ムーブメントを搭載した、ダイヤモンド付でないステンレススチール仕様の婦人用最新モデルを発表。オリジナル・モデルは日付表示のみを備えていたが、1998年、ワインディングゲージ(IZR)付モデルを発表。2005年、ムーンフェイス付モデルを発表。2006年、ノーチラス誕生30周年を記念し、自動巻クロノグラフ・モデルを発表。2010年、革バンド付の年次カレンダー・モデルを発表(プレスレット付モデルは2012年発表)。同年、初の革バンド付クロノグラフ・モデルを発表。2014年、ポピュラーな2つのコンプリケーション機能を搭載したノーチラス・トラベルタイム・クロノグラフを発表。今年、ノーチラス誕生40周年を記念し、オリジナル・モデルの造形美を体現したケース径44mmのホワイトゴールド仕様5976/1モデル(1,300個限定生産)と、ひとまわり小さいプラチナ仕様5711/1モデル(700個限定生産)を発表。いずれもブルー文字盤にダイヤモンドテックスを備え、40周年の文字を記載。



までの防水ケースはシャワーなどには有効でしたが、水泳には耐えられなかったのです。当初は製造工程にも課題がありました。それはケース側面から見える防水パッキンに関する問題です。多くの議論が重ねられました。

防水機能そのものは、この縁がはみ出した防水パッキンよりもっと内側で働いていました。このため水が入るとケース内に留まってしまい、出ることができませんでした。ムーブメントは保護されていましたが、外観上問題がありました。

専門家の協力により、問題は徐々に克服されていった。だがこのようにアヴァンギャルドなデザインにもかかわらず、当初、ケースは摺り合わせによる昔ながらの方法で製作され、部品間に互換性がなかったのは皮肉である。

各々のケース部品には照合番号が付き、ケースに合わせてガラスや文字盤も再カットされた。1975年には非公式ながら機能プロトタイプが完成し、当時デザイン部門を統括していたジェラルド・ブックスが、実際に手首に着用してのテストを開始した。

「1975年、私は最初のプロトタイプを着用してツェルマットに行きました。行き会うすべての泉や小川に時計を浸し、防水性能を調べました。その後太陽光にさらし、ガラスの内側が結露しないかを確かめました。もちろん、プロトタイプはすべてのテストに合格しました！」

翌年ノーチラスは発表されたが、これを盛大に迎えたのは：無理解であった。「多分、公衆はまだノーチラスを理解し、受け入れる準備ができていなかったでしょう。」

しかし少しずつ評価は定着していき「持前の慎重を交えてフィリップ・スターンは語る。

だがノーチラスに一目惚れした人々もいた。生みの親ジェラルド・ジェンタもその一人である。「ノーチラスはジェラルドのお気に入りのタイムピースでした。所有するすべてのモデルの中で、彼が最も愛したプロトタイプでした。亡くなる数年前、ジェラルドは新しい文字盤のデザインに取り組みました」。一世代前に行った創作をリニューアルすることは、彼を退屈させるどころではなかった。「ジェラルドはノーチラスを心底から愛していました。この時計は決して老いることがないと知っていたのです。彼にとってノーチラスは永遠のマスターピースでした。」